

在日韓国・朝鮮人への憎悪表現の問題

プラムック・カンガーン

2013年3月24日大阪市の鶴橋のコリアタウンで日本人の女子中学生一人がその周辺の在日韓国・朝鮮人に「死んで欲しい！いつまでも調子に乗つとったら、南京大虐殺じゃなくて、鶴橋大虐殺を実行しますよ！」と拡声器で宣言した(kotoku 2013)。記者の安田浩一によると彼女は親と同じく「在日特権を許さない市民の会」（在特会）に参加していたという(Penney 2013)。この団体は2009年12月から2010年3月にかけて朝鮮学校の周辺で上記の同じような街宣活動を行い、「犯罪者に教育された子ども」や「朝鮮半島へ帰れ」などと学生に言った。京都地裁はその行動は人種差別だと認めて賠償を命じ、日本初のヘイトスピーチ禁止判決となったと朝日新聞では報じられた。

一般的に和を守るのが日本の国民性だと言われているが、何故日本人の一部は上記のような過激な言葉を言うのだろうか。在特会はどのような団体で、何を考え、何をしようとしているのだろうか。何故彼らは在日韓国・朝鮮人への激しい憎しみを持つようになったのだろうか。またどのようにヘイトスピーチに抵抗すればいいのだろうか。本稿ではこれらの質問の答えを考察する。

会計士の桜井誠(仮名)はアメリカの「Tea Party」という運動に感化され、2006年に在特会を設立した(Fackler 2010)。団体のウェブサイトによると今年の11月の時点では会員数は約13,000人である(米田2013)。在特会は在日韓国・朝鮮人の特別永住資格・生活保護優遇・通名利用という「在日特権」を批判し、街宣やインターネットでの宣伝などの活動をしている。但し、特別永住資格は第二次世界大戦中の在日韓国・朝鮮人や台湾人にしか与えられない在留資格であり、在日韓国・朝鮮人に生活保護や通名利

用の特別な権利を与える法案もない(朝日新聞)。従って、在特会は特権に反対するではなく、ただ在日韓国・朝鮮人に対して嫌悪を表現していると見なせるだろう。

在特会は街頭活動の過激さでよく知られているが、樋口(2012)は会員は大体ホワイトカラーや自営業者で経済的には不自由がなく、学歴は低くない人々だと指摘している。そもそも彼らは外国人への嫌悪を持たなかったが、周辺国との問題を意識し、愛国心が湧いた。そしてインターネットで在特会の存在を知り、参加してみることにしたという。しかし、結局その普通の人達は在日韓国・朝鮮人に凶暴な憎悪表現が出来る、または許されるようになってしまった。Murai(2012)はその理由はグループで集まるからであると述べている。会員はグループの一員として認められるように、自分の考え方を多くの人の考え方方に合わせる。グループの考え方が「善」であり、それと違う物は「悪」だと信じ込めば、思考や行動が過激になりやすくなる。このようにして在特会の会員は上記のような残酷な言葉を言えるようになったと考えられる。

在特会のイデオロギーは根拠のないデマにもとづく極端な右翼的思想であることにもかかわらず、インターネット、特に「ニコニコ動画」という日本最大の動画投稿サイトで蔓延している(Murai 2012)。この現象は日本のネット利用者が右翼的思考を持つ傾向があることの一例だと指摘されている。特にニコニコ動画の「政治」のカテゴリーの動画のランキングの中では 92.8% の動画が右翼的思考を表現しているという。Muraiによるとニコニコ動画のようなサイトは極端なイデオロギーの普及、または新しいメンバーを勧誘するのには最適であると述べている。その理由の一つは利用者は大体影響を受けやすい若者であること。二つ目は右翼団体は沢山動画を投稿し、団体の考え方が多くの利用者に認められている雰囲気が作れること。三つ目は投稿者は匿名で、自分が過激派

の団体に参加していることを隠せること。また在特会の会員は他の右翼的なネット利用者（ネット右翼）と同じく、政府や主流のマスコミからの通常の情報を否定し、彼らのイデオロギーに沿ってネットにある情報しか信じないと指摘されている (Murai 2012, Sakamoto 2011)。つまり、彼らはインターネットを利用して団体と共に自らの誤った思考を強化しているのである。

京都地裁の判断は過激なデモ活動への抑止に至る物にはなるが、以上のことから在特会のような極右団体がネット上で大声を上げて活動出来る限り、韓国・朝鮮人への憎悪表現は薄れないであろう。従って、京都地裁の判断は言論の自由の保護の妨げになる上に、本当の問題の解決にも貢献していない。そうかと言ってサイト運営で極右的な宣伝を禁じることも言論の自由の妨害になる。ゆえにヘイトスピーチは少数派の人の行動である上に、断じて許されないと言う趣旨のカウンタースピーチが必要だと思う。オフラインでは「OSAKA AGAINST RACISM」(西岡 2013)のようなカウンター活動が行われ始めたのは喜ばしい展開だが、強いオンラインでのカウンター活動が存在しないのは心配点である。

以上、在日韓国・朝鮮人への憎悪表現の問題の原因と対策を見てきた。この問題は、人がグループで集まり、外部の人の意見を聞かずに、自らの誤った志向や行動を極端化するなどの社会、時代でもある問題であることが分かる。これに抵抗するのには強いカウンタースピーチが必要であろう。但し極端なイデオロギーは今オンラインで蔓延しているため、今までのオフラインでのカウンター活動だけは足りないと考えられる。どのようにオンラインでカウンター活動を行うべきかが今後の課題である。

参考文献

『朝日新聞』2013年10月8日「ヘイトスピーチ指弾 差別と認定、賠償・禁止命令
京都地裁判決」

米田隆司「報告：【緊急】サイモン・ウィーゼンタール・センター副所長講演に関する抗議文」<http://www.zaitokukai.info/modules/news/article.php?storyid=607>
(2013年11月14日アクセス)

樋口直人(2012)「排外主義運動のミクロ動員過程—なぜ在特会は動員に成功したのか—」、『アジア太平洋レビュー』9、pp. 2-16

西岡研介「あらゆる差別に”NO”を！ “ヘイトスピーチ”へのカウンター行動から生まれた「OSAKA AGAINST RACISM 仲良くしようぜパレード」」
<<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/36440>> (2013/10/25 アクセス)

Fackler, Martin. “New Dissent in Japan is Loudly Anti-Foreign.” *The New York Times* 28 Aug. 2010. *The New York Times*. Web. 25 Oct. 2013.
<<http://www.nytimes.com/2010/08/29/world/asia/29japan.html>>

kotoku, roka 「大阪最大のコリアタウン鶴橋で大虐殺予告（女子中学生）」
<http://www.youtube.com/watch?v=GoTBRpcZS0> (2013年10月31日アクセス)

Murai, Shunsuke. “Net Uyoku: A Global Confrontation of Radical Nationalism in the Borderless World.” Proceedings of the Asian Conference on Media and Mass Communication, Osaka, 2-4 Nov. 2012.

Penney, Matthew. “’ Racists Go Home! ’ , ‘ Go Crawl Back to the Net! ’ - Anti-Racism Protestors Confront the Zaitokukai.” 22 Apr. 2013. *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*. 31 Oct. 2013.
<<http://www.japanfocus.org/events/view/181>>

Sakamoto, Rumi and Allen, Matthew, “ ‘ Koreans, Go Home! ’ Internet Nationalism in Contemporary Japan as a Digitally Mediated Subculture.” 7 Mar. 2013. *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*. 14 Nov. 2013.
<<http://www.japanfocus.org/-Rumi-SAKAMOTO/3497>>